

小橋拓司：『地理的空間プラス』

私家版，2023年8月4日，B5判152p.

評者が小橋さんと初めて出会ったのは1987（昭和62）年の11月頃であったろうか。ご自身の修士課程での研究について熱く語ってくださった小橋さんのことを今も鮮明に覚えている。「博士課程に進学されるつもりなのですか？」と聞いたところ、「私のレベルでは難しいだろう」とおっしゃったため、立命館の博士課程には相当な猛者が集まっているのだらうと思った。

その後、小橋さんは兵庫県の県立高校教員となり、評者も中高教員などを経て兵教大に着任することになった。小橋さんは、兵庫県教委からの派遣で兵教大修士課程に学ばれ、教育GISに関する修士論文を作成されていた。2013年の国際地理オリンピック京都大会では運営でもご活躍になり、関西の地理教育関係者のネットワーク構築にも尽力された。地理オリンピックでは第3次試験を何度か関西で実施しているが、そこでは常にそのシャープな視点で、若い委員の憧れとなる存在として運営に携わられた。

地理オリンピックや人文地理学会地理教育研究部会などのお付き合いはその後も続いた。2017年の冬、明治図書「社会科教育」704号の「リレー連載わが県の情報 ここにこの授業あり237」で小橋さんのことを紹介させてもらった。「県立加古川東高校の小橋拓司先生は、理数科課題研究の空間科学の講座において、AEDの空間配置に関する研究をはじめ、社会の事象を空間科学的に分析する研究の指導を行っている。高校生らしさを、データを足で稼ぐ体力勝負であること、グループでの研究であること、成果を社会に発信するという三つの視点から定義し、その要素を満たすテーマを生徒とともに設定しているところがおもしろい。これらは高校生にやる気を出させる仕掛けである。しかし、それは同時に内容の深まりにもつながっているのだ。（後半は省略）」（本書151ページにも引用されている）。

そんな中、定年退職を迎える年度であった2022年の秋、10月22日に神戸大附属中等教育学校で開催される地理オリンピック関連のイベントで一緒できそうな機会を得た。しかし、その丁度1か月前の9月22日にメールをいただき、緊急手術をしたとの知らせを受けた。メールには「（京都大会の時の）紫の日本チームユニフォームのペアルックで登場したかったのですが、無理そうです。」と書かれていた。それから1年も経たないうちに逝去されたとの報を受けた。院生時代から存じ上げていた、同い年の地理教育の大切な仲間をこんなにも早く失ってしまったことは残念でならない。

本書は、小橋さんが発行し続けた教科通信「地理的空間」や数々のクラス通信がもとになっている。小橋さんの奥様も県立高校の地理教員で、評者のゼミ生も教育実習でお世話になったりしていた。奥様から本書をご恵送いただき、内容を拝見したときには、小橋さんらしいなと思った。あとがきによると、B5判2段組152ページの本書を入院中の2023年5月に書くと決め、6月4日のご令嬢の結婚式後に原稿整理を始められたとのことである。7月8日にご逝去なさるまでの1か月でこれだけの本を作りあげてしまうところなど、最後まで小橋拓司を貫き通されたのだと思った。凡人にはとてもできないことだ。

本書は、次の構成をとっている。

- I 地理的空間
- II 探究的空間
- III 日々好日

Iの地理的空間は、小橋さんが発行し続けてきた教科通信の名称だそう。ここには43の項目が並んでいる。「グラウンドに現れた旧河道」「USJの地球儀」「ゴミ置き場進化論」など、小橋さんから直接伺っていた話もある。「教室におけるトポフィリア（場所愛）への旅程」のように、教室に掲示が少ないことを、イーファー・トゥアンに関連付けて論じてしまうような小橋節満載のエッセイ、さらには「課題「立方体地球」」のように、定期テストに出題された奇想天外な問題と生

徒さんの解答の紹介もあり、奥の深い地理エッセイとしても楽しめる構成になっている。小橋さんは、とにかく24時間地理のことだけを考えているのではないかと思うほどの人なのだが、本当に生徒とともに地理を楽しんでいたのだということがわかる。

Ⅱの探究的空間では、クラス通信として書いたものから30項目がセレクトされている。「KJ法について」「研究とは何か」「勉強とは何だろう」など、総合的な学習の時間で探究的な学習を行う生徒へのメッセージが多く、30項目に加え、付論として「探究活動に関する教員用シート」も記載されている。そして、この付論には5ページも割かれていて、小橋さんがどれだけの力を注いだものかがわかる。ここでは、教科教育学を「学」ではなく、茶道や剣道、合気道などのような「道」ととらえ直してはどうかという提案がなされている。「道」では「型（形式）」（武道では「構え」）が重視される。型（構え）をしっかりと学ぶことが応用につながるというのだ。ベテラン教員として、teacher educatorとしてのアイデンティティを持っていらしたことも垣間見える。

Ⅲの日々好日では、生徒へのメッセージ、叱咤激励、クラス行事など、クラス通信に書かれたことが25項目にわたって紹介されている。クラス通信で毎日のように小橋さんの文章を読むことができる生徒さんたち、そして保護者の方たち（高校生とはいえ、これだけの文章を受け取っている生徒には、これをきちんと保護者に見せていた人も多いのではないか）は幸せだったろう。もちろん同僚の先生たちにとっても勉強になったに違いない。そして、最後から一つ手前に書かれた「だって拓司やもん」というエッセイには思わず涙がこぼれてしまった。

地理教師として、高校教師として、人間として、本書に込めた小橋さんのメッセージはどれも深い。読者としての直接的なターゲットは高校生だったかもしれないが、評者にとってもとても読み応えのあるものばかりであった。地理教員を目指す学生、現役の地理教員はもとより、できる限り多くの人に読んでもらいたい本である。

最後になりましたが、小橋さんのご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

（吉水裕也）